

ストローソンの遺産

山口尚 (Sho YAMAGUCHI)

京都大学・大阪工業大学

私の発表は、ワークショップ全体のキーノートとして、ストローソンの立場を概観し、いくつかの反論をとりあげた後、彼の見解を生産的に論じるための方向性を示すことを試みる。

ピーター・ストローソンが「反応的態度 (reactive attitude)」という概念を通じて決定論と道徳的責任をめぐる問題にそれまでにない観点を齎したことはよく知られている。彼は、従来の哲学者がこの問題を「過度に知性化」してきたと主張し、むしろ人間的な態度や感情が織り成す自然なネットワークへ目を向けるべきだと提案する (Strawson 1962: 91-93)。そして、たとえ決定論が真だとしても道徳的責任と連関する人間的な反応の全般を放棄すべき理由はないと述べ、独特なタイプの「両立論」を擁護する。

ストローソンの議論へは少なからぬ哲学者が反論してきた。

例えばネーゲルは私たちが反応的態度のネットワークをいわば「外側の」視点から批判的に吟味できると主張する。そして彼は、私たちが自身の行為の背後にある決定論的な要因に気づくことによって、人間的な反応が全般的に弱まる可能性を指摘する (Nagel 1986: 124-126)。

あるいはゲーレン・ストローソンは、ピーターが反応的態度へのコミットメントを「人間の本性」と称したのに対して、《決定論が真である場合に自由や道徳的責任が損なわれる》と感じる非両立論的な直感にも自然なところがあると応答する——それゆえ、ゲーレンによれば、反応的態度の自然性へ訴えたとしても非両立論の棄却へつながるかどうかは判明でない (Strawson 1986)。

またピアブームは、望ましい人格的關係には反応的態度が必要である点を認めつつも、決定論の考慮を通じて一部の反応的態度——例えば怒りや憤り——を放棄する方が人間関係は改善されると主張する (Pereboom 2001: 200-201)。

この種の反論——言ってみればストローソンの基本的発想から多かれ少なかれ距離をとり、彼とは違った見方を提案する根本的異論——は、たしかにそれ自体では貴重だが、対話的な観点から言えば生産性を欠く。むしろ、ストローソンの「道徳的責任」の見方はそれなしには気づかれなかったであろう事柄に気づかせてくれるものと言えるので——私は強調したいが——その基本的発想を共有したうえで「内的に」批判する方が実り多いだろう。

本発表は、最終的な目標として、ストローソンの基本的発想にできるかぎり明快な表現を与えることを目指す。そしてストローソンの「道徳的責任」概念の位置づけを

見極めたい。道徳的責任は——彼の見方においては——功利主義にも「リバタリアニズムのびくびくした形而上学」にも基づかない。それはもちろん反応的態度の連関のうち位置をもつのだが、私はこの事態をもう少し踏み込んで記述したい。結論から言えば、ストローソンは《人間の共同体がそのメンバーに課す道徳的要求がないがしろにされたとき、ひとが怒りや憤りを覚え、そして——責任を阻却する一定の条件が満たされないときには——加害者に道徳的な責任を帰し、処罰を通じて加害者へ苦痛を与える、という一連の事柄》がまさに人間関係の自然なあり方だと考えていた。ポイントは道徳的責任（および処罰）が、怒りや憤りなどの反応的態度によって基礎づけられるものではなく、怒りや憤りを含む人間関係の自然な連関の一部になっている点である（かくしてストローソンは《はたして私たちはひとに道徳的責任を帰しうるのか》という正当化問題を完全に回避する）。逆から言えば、例えば処罰という制度のもとであるタイプのひとへ苦痛を与えることは、それが有益だから実践されているのではなく、むしろ人間的共同体の自然なあり方の一部であるのである。

さて、仮に今述べたことがストローソンの基本的な主張であって——もちろんこの点はまだまだ再考の余地がある（もっと深い読みがあるかもしれない！）——さらにこの主張が実際に正しいとしよう。この場合、道徳的責任をめぐる問題は解決されたことになるのか。私は「否」と言いたい。むしろ上記の基本的な主張はさらなる問いへの出発点となる。例えば、以下のような問いがあるだろう。なぜ人間の共同体はこのようなあり方をしているのか。道徳的責任は諸々の「道徳感情」と具体的にどのような関係にあるのか（その相互作用のメカニズムはどのようなものか）。これはストローソン自身がとりあげなかった問いであり、答えるためにはおそらく進化心理学・進化倫理学・道徳心理学などの道具立てが必要になる。こうした「ストローソンの遺産」的かつ現代的な問いを続くふたりの発表者へ投げかけて、キーノートの責を果たしたとしたい。

参考文献

- Nagel, Thomas, 1986. *The View from Nowhere*, New York, Oxford: Oxford University Press.
- Pereboom, Derk, 2001. *Living without Free Will*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Strawson, Galen, 1986. *Freedom and Belief*, revised ed. 2010, Oxford, New York: Oxford University Press.
- Strawson, Peter, 1962. "Freedom and Resentment," *Proceedings of the British Academy*, 48: 1-25, reprinted in Watson 2003: 72-93.
- Watson, Gary (ed.), 2003. *Free Will*, 2nd ed., Oxford, New York: Oxford University Press.